


研究者総覧：玉岡 賀津雄 (TAMAOKA, Katsuo)

氏名	玉岡 賀津雄 (TAMAOKA, Katsuo)	
職名	教授	
所属講座	日本語文化専攻日本語教育学講座	
学位（専攻分野）	Ph.D.・カナダ，サスカチュワン大学	
メールアドレス	ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp	
個人のホームページ	http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~ktamaoka/	
研究分野	心理言語学 (psycholinguistics)	
	言語の認知処理 (cognitive processing of languages)	
	第二言語習得 (second language acquisition)	
現在の研究テーマ	音韻処理，語彙処理，統語処理，コーパス研究など	
所属学会	Psychonomic Society	
	日本語学会	
	日本認知科学会	
主要著書・論文	玉岡賀津雄・木山幸子・宮岡弥生 (2011). 新聞と小説のコーパスにおけるオノマトペと動詞の共起パターン. 『言語研究』 139.	
	Tamaoka, K., & Taft M. (2010). The sensitivity of native Japanese speakers to On and Kun kanji readings. <i>Reading and Writing</i> , 23, 957-968.	
	玉岡賀津雄・邱學瑾・宮岡弥生・木山幸子 (2010). 中国語を母語とする日本語学習者によるかき混ぜ語順の文理解——聴解能力で分けた上位・中位・下位群の比較. 『日本語文法』 10(1), 1-17.	
	Tamaoka, K., & Ikeda, F. (2010). Whiskey, or Bhiskey?: Influence of first-element and dialect region on sequential voicing of <i>shoochuu</i> . 『言語研究』 137, 65-80.	
	Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama, S. (2010). Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. <i>Journal of Asian Pacific Communication</i> , 20, 23-45.	
自己紹介文	<p>若いころは、カナディアン・ロッキーでスキーを、オーストラリアでスキューバを楽しむなど、多趣味でした。ダイビングは、オーストラリアでダイブマスターを取得しました。しかし最近では体力が衰えて、「研究」だけが趣味として残りました。</p> <p>カナダで、インディアンの学習・教授様式の研究で修士号、日本人児童の言語習得で博士号を取得しました。日本語の認知処理のメカニズムを解明することを目的として、音韻、形態素、語彙、統語処理の研究を行っています。日本語および英語の第二言語としての習得も主</p>	

要なテーマです。最近では、構造方程式モデリング(SEM)を使って、言語習得の研究を展開しています。コーパス研究にも着手しており、日本語のコーパスを使った複合動詞、サ変動詞付加、オノマトペと動詞の共起、自・他動詞を、決定木分析など多変量解析を使っ



カクチケル語の文処理実験の準備

て研究し、論文を出版しています。音韻処理の研究論文では、日本人の音韻処理の単位および連濁、漢字の認知では、音韻・書字・意味の活性化、音訓読み、意味的構造の影響、書字行動、筆順の研究などがあります。統語処理も主要なテーマで、文の正順語順を決める言語特性の研究を、日本語をはじめ、韓国語、トルコ語、シンハラ語、カクチケル語(グアテマラのマヤ言語、写真を参照)など多様な言語で実施しています。社会言語学の研究もあり、ポライトネスや男女言葉の研究も行っております。実験的語用論(experimental pragmatics)の分野を開拓したいと思っています。

受験生へのメッセージ

玉岡の研究室では、言語および言語教育を対象としたあらゆる研究における実証的方法論を身につけることを主眼として指導しています。現在、当研究室に所属する学生は、主に実験的アプローチによる研究を進めています。



平成 22 年度博士課程修了者(大和、斉藤)

従来、言語の研究はとかく一個人内の「直感」で行われ、その議論は科学的な「実証」に基づかないまま展開される傾向があったといえるかもしれません。日本語教育学という研究領域の健全な発展のためには、然るべき手法で得られたデータの適切な検証を通して、言語現象が論じられなければならないでしょう。本研究室に所属する博士前期課程・後期課程の学生たちには、現象を科学的に実証する方法論を習得し、よりレベルの高い論文を執筆できる能力を身につけてもらうように指導していきます。そのような実証的研究能力を身につけたうえで、日本語教育の様々な問題を考えられるようになってほしいと思っています。研究に対する熱意のある受験生を待っています。

